

書評

『他者—人類社会の進化』

河合香吏 編

京都大学学術出版会 2016 年 3 月刊 4200 円（税別）
（466 ページ）

本書は、シリーズの第 3 部目にあたる。本書と同じく河合氏が編者を務めたシリーズ第 1 部は『集団—人類社会の進化』（2009 年刊）、そしてシリーズ第 2 部は『制度—人類社会の進化』（2013 年刊）である。本第 3 部目の執筆者陣は過去の 2 部のそれとかなりの重複があり、内容的にも過去 2 部の延長線上で書かれている。

まずは本書の概要を示しておこう。全体で 466 ページと、かなり分厚い印象だ。序章と、それに続く 19 の章から成り立つ。19 の章はそれぞれ別の研究者が単著で著した論考である。19 名の執筆者陣を大きく 2 つに分けると、9 名がヒト以外の霊長類研究者、残り 10 名が人類学者である。「他者」を切り口にして人類社会の進化的基盤に迫ろうという試みとなっている。チンパンジー、ゴリラ、アカコロボスとダイアナモンキーの混群、そして牧畜民から狩猟採集民のヒトに至るまでの様々な題材をもとに、他者とのインタラクションや、社会における他者の位置づけなどについて論じられている。

シリーズ前作の『制度—人類社会の進化』に関して、『霊長類研究』第 32 巻 1 号において市川光雄氏が書評を寄稿している。ここで市川氏は、執筆された個々の論考を取り上げて丁寧な評価をおこなっている。評者として本来なら過去 2 部の内容に目を通してから本作を読むべきところをそうしていない私には、市川氏のように個々の論考に対して意見を述べる資格に欠ける。ただ、一般の読者のためにフォローすると、過去 2 部を読まずに本作を読んでも基本的には理解できるように配慮されている。また、過去 2 部には参加せずに本第 3 部にのみ執筆している執筆者もいるので、いきなり本第 3 部から読むのも決して間違いではない。

さて、私は、どのように書評を書いたら良いだろうか。評者として、たとえば学術論文の査読者のような態度で、書かれた内容の詳細について意見を述べ、本書の主題に関する議論を深めて学問の発展に貢献するという道もあるだろう。それは、潜在的には執筆者に対するメッセージを含めて書く書評と言える。そうするには過去 2 部の内容を把握しておくのが筋であり、私にはその任を果たせない。そこで取る別の道は、本書を全く読んでない人に向けたメッセージを発する、ということになるだろうか。潜在的な読者に対する案内役のようなものである。

すでにここまで拙評を読んでいただいた方には自明

のことになっているが、本作はシリーズものの第 3 部である。河合氏の序章およびあとがきによると、2005 年度に開始された東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究」が土台となった。この枠組みでおこなわれる継続的な議論をもとにシリーズ前 2 作が出版され、それぞれ英語版も併行して書かれている（『制度—人類社会の進化』の英語対応版は 2017 年 2 月刊行予定）。

研究会で濃密な議論がおこなわれたらうことは、本書の中にもそこそこに見て取ることができる。過去 2 部への言及や、本作の他の章への言及が各所に散りばめられ、それぞれの執筆者の過去の論考とのつながりや、本書内の別の執筆者の論考とのつながりが明示されており、全体的な関連性を強く感じさせる内容となっている。つまり、執筆者陣がうまくひとつのチームにまとまった様子が表れている。このような、複数の執筆者の分担執筆による書物の場合、往々にしてそれぞればらばらの内容が書かれることになりがちであるが、本書のように高度に有機的な連携を保っていられるところからして、編者をはじめとした参画研究者の相当な努力がうかがえる。

前作『制度』の書評において、市川氏は、“データに基づく実証科学を標榜する現在の模範的な霊長類研究からみれば多かれ少なかれ「逸脱」とも考えられる”、“現在の霊長類学にみられるデータ中心の実証主義とは距離を取っている”と評し、「思弁霊長類学」というラベルを与えている。執筆者陣のこうした態度は本作でも同じである。定量的データは本書のどこにもなく、データの統計解析結果に基づくディスカッションという体裁とは大きく距離を置いたものである。主たる論法は、ヒト以外の霊長類なりヒトなりの逸話的観察記録を提示し、そこから解釈される執筆者の「他者」論を繰り広げるということである。

例えば第 6 章西江論文では、チンパンジーたちの行動がときに我々人間の合理的な説明を超える不可解なものであること、そのことによって逆に我々人間社会において他者は合理的な説明が可能なように制度によって回収されるさまが見えてくることが示される。続く第 7 章伊藤論文でも同様に、チンパンジーにとって他者の行動が理解不能な場合があることが示され、そして最後に、人間にとっても他者の理解不能性に寄り添うことが重要なのではないかと結ばれる。チンパンジーと 20 年ほどかかわっている私から見ても、チンパンジーの行動は時に不可解である。そうした不可解な行動は、現在の科学論文では研究材料にできずこぼれ落ちていくことが多いが、本書ではそうしたこぼれ落ちた部分、ただしおそらく重要な意義をもつ点がビビッドに描かれている。

本書において、殊にヒト以外の霊長類を題材にした

章で私が特徴的だと思ったのは、カッコ（「」）の多用である。チンパンジーの逸話を記載して解釈する場合に、例えば、“「不合理な」チンパンジーのやり方”，“「その場しのぎ」のやりとり”，“「よそ者」の他者性に対する彼らの「タフさ」”，といった具合に表れる。こうしたカッコの使われ方は多様で多義的であるが、人間ではないチンパンジーの行動を表し解釈する場合に、仮に人間行動を表現するには自然だとしてもチンパンジーに対して使用するのにはある種の留保が必要であるという意識から、カッコで括って地の文から浮き立たせることでその留保感を表現しているということになるだろうか。

少なくともいわゆる英文学術科学論文ではこうしてカッコで括った語句を多用ということはむしろ避けられ、研究者間で客観的だと同意されている無難な用語をカッコ無しで用いることが普通であるから、それとは対照的な表現方法を用いている本書の性質を表すものとして、カッコの多用がまず私の目に留まった次第である。具体例を挙げると、「見えないよそ者の声に耳を敬てるときーチンパンジー社会における他者」と題された本書第8章花村論文では、21ページの本文の中に、カッコで括った語句や節が合計307回登場する。市川氏のラベリングした「思弁霊長類学」にいわば必然的に付随した特徴なのかもしれない。

上記のようにヒト以外の霊長類を題材にしたのが計9章であるのに対して、生態人類学・社会文化人類学の立場からの章がほぼ同数の計10章ある。私がこうした領域に無知なためもあって、書かれている内容に純粋に引き込まれた。エチオピアやウガンダの牧畜民、ボツワナのブッシュマン、極北のイヌイト、ザンビアやタイやインドやマレーシア・ボルネオ島や太平洋バヌアツの人々の様々な生の物語が描かれ、私の知らなかった地平に導いてくれる。マレーシア・ボルネオ島は私も過去に調査の関係で4度渡航したことがあるが、第14章内堀論文に書かれたボルネオ島イバン民族の話にはまったく無知であった。この章では、霊魂や精霊をめぐる話が描かれる。霊魂や精霊は、ある種の他者であり、そして霊魂や精霊を想像する行為はヒトに特有なことだと位置づけられる。ただし最後に、ヒト以外の霊長類は本当にそうした想像をしないのか、と疑問が呈される。ヒト以外の霊長類はどんな夢を見るのか、著者が結びの文章で書いた問いかけに、私も読みながら共感した。

人類学者が書いた論考の中でも、霊長類研究への接点がある程度意識され、言及がなされる。霊長類研究者、特に大型類人猿の行動や認知の研究者であれば誰でも知っているだろうトマセロ、ドゥ・ヴァール、バーン、ホワイトウンといった面々の著作に触れた論述展開が、いくつかの章でなされている。意図性の共有、共感、

社会的知性などについての霊長類学的研究が手際よくまとめられ、これらの知見と人間行動との接点が書かれている。

もう一度話を霊長類学者が書いた章に戻すと、ここでもやはり人間との接点がある程度意識されている。人間を対象とした観察との比較に基づく考察をおこなっている章も複数ある。ただし、こうした章で取り上げられているのは、少なくとも具体的観察事例を取り上げているものについては、もっぱら発達心理学的観点からの人間研究となっている。本書が、霊長類学者と生態人類学、社会文化人類学の集まりから構成されていることを考えると、霊長類学と生態人類学の立場からの直接比較、というようなことも想定できると思う。海外に目を転じると、クリストフ・ボエシュがチンパンジーの石器使用と狩猟採集民アカの道具使用の双方の現地観察に基づく直接比較にすでに着手している。すぐにでも同様の試みが日本人研究者から出てきてもよいのではないかと感じた。

本書の土台になる共同利用課題「人類社会の進化史的基盤研究」は2015年度から新たなテーマで継続しているそうだ。そこからすると近いうちに第4部も発刊されるだろうと期待できる。拙評が、本書に書かれた学問的試みに興味を持つ方々に広く読まれるきっかけになることを願うと同時に、そうした方々や本書執筆陣の中から近い将来新たな研究が生まれてくることを期待したい。

(京都大学野生動物研究センター 平田聡：
hirata.satoshi.8z@kyoto-u.ac.jp)